

書評

山路勝彦・田中雅一編著 (2002)

『植民地主義と人類学』

関西学院大学出版会

崔吉城

一昔前まで、植民地は全世界のグローバルな現象であった。その遺産は戦後に生き続け、現在のわれわれの人間関係や国家間関係に影響を及ぼしている問題である。それにもかかわらず、日本では加害国であったことを意識してか、戦後この問題に対して積極的に研究がされたとは思えない。しかし、最近優れた研究成果が現れるようになった。たとえば、*Anthropology and Colonialism in Asia and Oceania* (Bremen・清水昭俊編、Curzon Press, 1999)、『植民地主義と文化』(山下晋司・山本真鳥編、新曜社、1997)、『植民地経験』(栗本英世・井野瀬久美恵編、人文書院、1999)などを挙げることができる。東アジアの人類学的植民地研究としては『植民地人類学の展望』(中生勝美編、風響社、2000)がある。今後、それらはより深められるべき課題であろう。韓国では植民地に関して、抗日独立運動史としての研究以外は注目されることがなく、特に人類学的研究は少ない。そうした事情は植民地を賛美するように誤解され、反日派からの非難を恐れてのことであろう。評者は日本植民地の歴史が幾たびか日韓関係を危うくする状況を感じながら暮らしてきた者として植民地の問題に関心を持つようになった。評者は反日感情の壁を越えようと、編著として韓国語版の『日帝時代 한 漁村의 文化変容』(亜細亜文化社)、日本語版の『日本植民地と文化変容』(御茶ノ水書房)を出版し、目下サハリンの朝鮮人に関する調査研究を進めている。そして東アジアの植民地研究、さらに広い視野を受け入れる必要性を切に感じてきた。

評書『植民地主義と人類学』はそれに答えるものであった。

本書は京都大学人文科学研究所の共同研究班の成果である。本書の構成は第一部植民地主義と人類学、第二部統治政策と影響、第三部植民地とジェンダー、第四部植民地思想運動、第五部ポスト・コロニアル状況である。3年間で44回、92名の報告と討論を経て出されたものであり、まず編者たちの人脈の広さに敬意を表したい。本書は21章からなり、広大な地域、つまり日本を中心としたアジア、アフリカ、オセアニア、南米に亘ってさまざまな主題で報告されている。編著者の一人である山路勝彦が人類学と植民地主義、研究史を鳥瞰しつつ「比較研究という観点から日本を展望するという伏線が、あるいは世界史的に同時性を見る視点がいわば横糸としてぬいこめられたことになる」と本書の狙いを述べているように(31頁)、比較が本書のポイントである。そこで評者は全てを批評することは難しいが、東アジアにおける日本の統治を中心に、つまり台湾、朝鮮に関するものを主に取り上げ、それらと関連づけて、本書の横糸である世界の植民地と比較し検討してみたい。

まず、日本植民地であった朝鮮半島のポスト・コロニアルな問題から取り上げたい。T・フジタニの「国民国家と帝国の男性主義的な紐帯：アジア太平洋戦争における朝鮮人‘皇軍兵士’に関する言説」は、被植民地内部から植民地政策に同化していく側面、つまり韓国人が自らすすんでそのようなプロジェクトに参加したことの背景には様々な個人的状況や社会的理由が存在したという事実を明らかにする。植民地とはいえ、暴力的な側面だけがあるわけではない。植民地に抵抗する者もいれば、コラボレーター(協力者)もいた。それはどこの植民地にも存在する。特に朝鮮では日中戦争から敗戦までの期間に、多くの朝鮮人知識人たちが自らを「親日」化していく過程が最も進んだ。すなわち、戦争を聖戦と賛美し、大東亜共栄圏の理念に賛同しながら親日派となっていくのである。彼らは戦後「反民族特別委員会」により処罰の対象になり、現在も非難されている。この論文ではその「親日」化過程を分析している。隣接国家を植民地化した日本は同化政策をとった。日本の植民地主義は「日鮮同祖論」、そして「内鮮一体」という標語をもって統治の正当化をなした。特に終戦直前、南次郎総督によって皇民化が強力に実施された。それは創氏改名、内鮮結婚、徴兵などであった。この論文では植

民地朝鮮を「女性」と見なして、志願兵などによって朝鮮が軍国化つまり男性化していくと分析する。それは秋葉隆が朝鮮文化を家族主義といったものと似ており、それに当てはまるかも知れない。一般的に韓国と中国とは兄弟関係であり、中国が兄とされるが、本論文では日本との関係で朝鮮人男性を「幼児」「女性」とする見方がとられる（315頁）。しかしそれは一般的ではない。朝鮮人男性は模範的になり軍人になり真の日本人となって民族差をなくすという過程、そしてその母や妻たちも真の日本人化しようとする意識構造を分析している。この論文はジェンダーの視野から朝鮮人の女に和服を着せるということまで触れている。この延長線にある軍国化時代の朝鮮人たちの皇民化の過程については韓国の親日文学の研究と対応している。そこで問題になるのは多くの知識人が1930年代後半から終戦までの間に「親日」化する時代性、戦時非常時代を考えなければならない。もう一つは当時の日本人、特に在朝日本人たちの植民地主義化、聖戦への参戦のプロパガンダ的な行動とも連動する。この論文では朝鮮人側から創氏改名をも自ら歓迎するという。この問題は水野の論文と繋がる。

水野直樹の「朝鮮植民地支配と名前の‘差異化’：内地人ニ紛ハシキ姓名の禁止をめぐって」は朝鮮人自らが日本風の名前をつけることを許可しなかった日本植民地政策に関する論文である。従来創氏改名の研究は主に植民地側の強制的なイメージとしてのものが多かった。それは日帝時代を舞台とする林權澤監督の映画『族譜』（梶山季之の原作）に見られる。日本は、韓国名を日本名に改名させるという、いわゆる「創氏改名」の政策を進めていた。水原の大地主である薛鎮英（ソル・ジニョン）は、なかなか改名に応じず、その小作人たちがこれに従い改名しなかった。その説得のために総督府総力一課から派遣された谷六郎に説得され、その圧力のなかで薛鎮英（ソル・ジニョン）は自殺するというストーリーである。しかし、本論文では創氏改名以前、日韓合併直後には朝鮮で日本風の名前に変え、服装や下駄を履くなど「日本人化」への風潮があったことを指摘する。それについて同化として歓迎すべき見方もあったが、他方警戒すべきだという見方もあり、総督府は朝鮮人に内地人と紛はしき姓名を名乗ることを許さない措置を取ることとした（153頁）。しかし総督府はその後創氏改名政策に転換した。それについて「日

中戦争勃発後になされた同化・皇民化政策の強化の一環として、名前についても日本名を奨励する方針が打ち出されたことは間違いない(159頁)という。この論文はその転換過程について詳しく論じておらず、今後さらなる研究が望まれる。現在、在日朝鮮人たちは日本名を通名として使っているのがふつうである。それは創氏改名以前、朝鮮人が自ら日本名を使って日本化しようとした風潮、あるいは最近ニューカマーたちが日本名を使うこととどのように結びつくのであろうか。検討する余地があろう。

内鮮結婚も皇民化政策の重要な柱の一つであった。森木和美の「移住者たちの内鮮結婚：植民地主義と家父長制」は、それを内鮮融和の象徴的なものであったとする。内鮮結婚した夫婦には表彰状と記念品が送られたりしたが、戦後複雑な関係になった事例も多い。従来、内鮮結婚は時代に翻弄された結婚として研究されてきたが、本論文では戸籍の移籍に着目して人口移動にも関わる問題として触れている。在朝日本人と朝鮮人との民族間結婚は内地での結婚より少ない。一方、内地には労働移民がより多いという。労働移動は民族間結婚や国際結婚などを増幅することがあるが、この論文はそれを証明している。しかし、同時に結婚が人口を移動させる力にもなるという点も注目すべきである。つまり、朝鮮人が労働移動や結婚のための移籍によって地理的、アイデンティティの移動が伴うという視点からの考察である。

戦後朝鮮半島では反日、日帝残滓の清算をしてきた。その最大のものが最近の総督府庁舎の解体である。親日に対する反日運動は愛国主義の一環であった。キリスト教でも戦前に天皇制、聖戦を認めたか否かによって戦後葛藤分裂したりしたが、岡田浩樹の「韓国仏教の屈折と蛇行：妻帯僧問題に見いだせるポスト・コロナル状況」はこれに関連して仏教の問題を扱っている。仏教の中では時折浄化運動、例えば寺院内に民間信仰から立てられた歴史的な山神堂や七星閣を破壊することが行なわれてきた。宗派の主導権争奪のために暴力化していることはマスコミを通してよく知られている。日本時代に近代化と日本化した妻帯僧派と比丘僧(独身派)は対立した。本論文はそこに見られる親日と反日、攻撃と防衛の論理や言説を分析している。仏教内部でのポスト・コロナル状況がよく分かり、斬新な論文である。しかし、仏教教理上の葛藤に触れられていないのは残念である。それに関しても研究が

進められることを期待する。だが、植民地遺産の清算を叫んでも植民地は歴史的事実として生きつづけることはいうまでもない。上杉妙子の「英国陸軍グルカ旅団の宗教政策—現地人兵士と二つの国家」は植民地協力者の手先とも言われた人、軍隊さえ独立後、被植民地に持続したことを明らかにしている。

日本の植民地宗教政策は他の地域とも連動したものであろう。ツー・ユンフイの「植民地統治論としての台湾宗教研究」は警察や行政管理の迷信への研究が政治的な利害の計算と関連していることを指摘する。特に当時、在来宗教は文明の進歩に支障となつておられると思われていた。そしてそれは迷信であり、それを信仰する台湾人は日本人より低位であると主張された。このことは警察官として後に総督府の囑託になり、民俗を研究した今村鞆も基本的には民間信仰を迷信として扱ったことと類似している。それはおそらく日本の植民地政策とも関連があると思われるし、秋葉隆の巫俗研究にも当てはめることができる。しかし日本植民地の近代化、開発政策は植民地朝鮮の風水信仰などを無視して、火葬と共同墓地制を早急に取り入れようとして強い反発を受け中止になった。このような脈絡から、福浦厚子の「墓地を通して見た植民地主義：シンガポールの英領直轄植民地期を中心として」では、イギリスがシンガポールの墓地に関して公衆衛生の問題として対応したのに対し、中国系シンガポール人にとって墓地は神聖な空間であり、イギリスと対立したと述べられている。評者はこの問題に植民地初期の日本の宗教政策との類似点を見いだした。窪田幸子の「ジェンダーとミッション：オーストラリアにおける植民地経験」はミッションナリーによるジェンダーの変化を考察したものであるが、それがキリスト教の信仰によるものなのかという点には触れていない。また植民地政策との関係も知りたい。伊地知紀子の「植民地化と生活世界の可変性：韓国・済州島の一海村の事例から」では村人の生活は植民地と断絶したものではなく、平凡に続く村人の生活が描かれている。

次に注目したいことは韓国での反日の状況に関する問題である。朝鮮総督府博物館の設立、遺跡修復など、観光名所の開発を行った。つまり、文化財や文化遺産として植民地政策のなかで多くのものが発見され見いだされた。そして、戦後それらが韓国人の「我が文化遺産」として位置づけられ、民族

的アイデンティティの拠り処になった。金谷美和の『民衆の工芸』という他者表象：植民地状況下の中国北部における日本民芸運動は植民地支配者側からの民衆芸術運動さえ大東亜共栄圏時代に植民地主義化していったと克明に分析する。韓国では朝鮮文化愛好者として教科書に載り、評者も習ったことのある柳宗悦も植民地主義から完全に免れないという。池亀彩の「パリ・インドシナ美術館：ムラージュと回復される時間」では文化の本物の所有をめぐる問題を扱っており、返還を強く要求することはもう一つの暴力であるという。その指摘は韓国が日本に文化財返還を強く求めていることとも繋がる。

また韓国ではポスト・コロニアルな状況によって反日的展示館も必要になって出来たのが独立記念館である。荻野昌弘の「民族の展示：植民地主義と博物館」は植民地を被った地域で博物館がその植民地をどのように展示するか注目した論文である。荻野は韓国の独立記念館で残虐性を展示していることに触れている。これは1982年の日本における教科書問題で反日感情が高まり、1987年に開館したものであって、反日感情の産物ともいえる。反日的な記念館は中国東北部ハルピンにある七三一部隊記念館など中国各地でもみることは出来る。評者は北朝鮮の革命記念館、ハルビン、北京の戦争記念館などの展示を見て回ってきたが、独立記念館ほど蠟像やミニチュアなどを利用して被害を誇張したものはないように感じた。荻野は「博物館は、現実が生みだす暴力を回避・隠蔽し、暴力を博物館の空間に封じ込めることで秩序を維持する装置である」（375頁）という。独立記念館が日本に対する暴力を封じこめることは出来るかもしれないが、私には朝鮮総督府庁舎を破壊した暴力がこの記念館を支える反日感情と無関係なこととは思えない。

日本植民地化の重要な政策の一つは日本語「国語」政策である。この政策は世界的視野から見ると英語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語などの植民地における宗主国化現象と軌を一つにする。朝鮮語のハングルを世界的に優秀な言語と思っていた朝鮮人にとってこの政策は一番悪辣な最悪の絶対悪の朝鮮語抹殺として非難される。安田敏朗の「植民地とバイリンガリズム：安藤正次と台湾」は日本の国語政策の基本、つまりバイリンガリズムを一次的な現象としてみて、植民地を「国語」で統一しようとした

ものである。これは植民地朝鮮でも同様である。しかし植民地の長かったカリブ地域ではクレオール化された言葉によりナショナル、あるいは地域を越えて普遍的広がりを持つ。そのことが、石塚道子の「カリブ海地域の植民地主義と文化人類学：クレオールな主体をめぐって」により明らかにされている。

元木淳子の「アフリカ人女性作家と植民地主義：カリクスト・ベヤラを中心に」はアフリカで生を受け、フランスで教育を受けた女性作家が植民地主義のイデオロギーに染まる危険性を持っていながらその創作活動によって祖国に還流され、それがグローバリゼーション時代に脱植民地化のふるまいとなったと述べる。このような現象は日本植民地時代の朝鮮人で、日本語文学で日本の文壇にデビューした作家たち、張赫宙と金史良などやその文学の流れを引き継ぐ、宗主国の言語で文学活動する在日作家の李恢成などの被植民地作家を想起させる。彼らに関する日本の文壇の評価は在日の作家という点で同情的なものであろうか、それとも植民地や民族を超えた文学作品そのものへの評価であろうか、この論文からこのような問題を検討すべきだと感じた。韓国では最近「親日文学」というジャンルを設定して批判の対象としている。しかしそれがグローバリゼーション時代になると自国文学に取り入れられるか、あるいは自国文学がその変化に左右される傾向さえないとはいえない。植民地が長かったアフリカ地域ではよりはっきり表れる。

植民地に新しい時間構造を持ち込むことは普通である。カレンダーだけではなく、時間観念の導入である。山路勝彦の「ブヌン族の絵暦研究積義：植民地台湾での人類学研究の断面」は台湾の民間で発見したブヌン族の絵暦に関して、主に人類学者馬淵などの研究を通じて論じている。それは1年間の周期にして祭事暦が中心に記載されている。それには時間構造と祭事が組み込まれている。前者では祭り中心に研究が行われたことを論じた。それらの研究も植民地官吏と人類学者の間の差はそれほど大きくなかったようである。実際、植民地行政と人類学者との関係はそれほど距離があったとは思えない。朝鮮植民地主義者の今村頼と京城大学秋葉隆とはアマチュアとプロの差はあっても基本的な見方、つまり原始的伝統文化に注目し、大東亜戦争を賛美するところでは同様であったと思われる。それはイギリス植民地においても同

様であろう。しかし中でも時と場合においては距離をおこうとした人もいた。栗本英世の「植民地行政、エヴァンス＝プリチャード、ヌエル人」は、ヌエルにおいてエヴァンス＝プリチャードが植民地行政と距離をおこうとしたことがわかる。

細谷広美の「植民地主義と他者表象：ペルーの『ピシュタコ』をめぐる語りの諸相」ではペルーにおいてスペインへの恐怖として現れた妖怪は植民地期にはスペイン人やカトリック教会を象徴し、戦後にはその状況によって兵士になったりすると述べる。韓国で日本植民地時代に日本の巡査が守護神である神木を切ってその場で息絶えたといい、植民地日本は朝鮮の山の脈を切って朝鮮に英雄が出ないように呪ったという伝説がある。これらのほぼ噂に近い物語が創られたことは両国に共通する。

松田素二の「創られた王国の彼方に：西ケニヤ・ワンガ王国史の歴史語りから」はポスト・コロニアル時代における去られた植民地以前の純粋な時代、王国を語ることで、アイデンティティが強化されている状況を明らかにしている。この論文は、戦前の植民地政策の実態分析であると同時に、「植民地」を戦後の問題として論じるものである。田中雅一の「ヒンドゥー寺院の法人類学：南インド・チダンバラム・ナタラージャ寺院をめぐる（1850-1980）」は、あるヒンドゥー寺院式に関する規定や慣習の記録を法人類学として分析したものである。

以上、本書は広大な地域を対象にさまざまな主題のもとに編集されており、通読も容易ではない。しかし、東アジアの植民地を研究する上で、大きな収穫を得ることができた。各論文は比較されることを前提に、あるいは期待しているようであるが、論文そのものが積極的に比較を企てようとしたものは少ない。そこで評者は韓国の植民地に基づいて関連性を考えながら読み通した。そして、山路のいうように「植民地主義のもたらした問題の深さ」と「歴史的衝撃の重大さ」に同感した。その意味で本書は日本の植民地を射程にしたものでありながらも、世界に目を向けるものであり、様々な各論を束ね繋げて読むことが可能なものであった。植民地は政治、経済的な開発であり、文化、宗教、言語などの開発である。そこに人類学者が関与したり、距離をおいたりすることもあった。植民地が終わってもその中身はすぐ断絶するも

のではなく、ポスト・コロニアル状況を形成している。そこでは反旧宗主国の感情、国作りのためアイデンティティが強まる現象が見られる。既述したように本書を通して刺激された問題は非常に豊富である。しかし以上の論文だけで植民地が抱える問題がすべて議論し尽くされたわけではない。より横糸の繋がりのある著書が現れることを待望したい。人脈により分野が広がりを持つ分、取捨選択ができず羅列した感を感じざるを得ないのも正直な読後感であった。

(kschoi@hiroshima-u.ac.jp)